
バカとテストと召喚中！

日南六町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚中！

【Nコード】

N5263Z

【作者名】

日南六町

【あらすじ】

学園長が勝手に進めていた他校との交流祭。それに参加することになった明久たち。果たしてきちんと説明できるのか！

明久「心配するのそこじゃないと思う……」

あんなキャラこんなキャラが文月学園のシステムに挑みます。

第一問 交流祭（前書き）

恒例のバカテストです。これ考えるのは大変なので一話が長くしてあります。

第一問 交流祭

バカテスト 地理

第一問 以下の国の首都を答えなさい

- (1) インドネシア
- (2) トルコ

【姫路瑞希の答え】

- (1) ジャカルタ
- (2) アンカラ

【教師のコメント】

正解です。

【土屋康太の答え】

- (1) ジャックカルタ

【教師のコメント】

テスト前にトランプはやらないようにしましょう

【吉井明久の答え】

- (2) カラカラ

【教師のコメント】

君の頭の中が心配です

「19!」

「20だ!」

「わしは21じゃ」

「……………ブラックジャック」

「「くそー!!」」「」

ここは文月学園の2年F組。現在は昼休みで僕たちはバカ仲間の3人と共にブラックジャックをしていた。

「ムツツリー二強いね」

「五戦連続じゃな」

「午後のテストで弾みがつけばいいがな」

これをしていてムツツリー二はジャカルタをジャックカルタと書いていたのだった。

そんなこんなで昼休みを満喫していると不意に教室の扉が開いた。

「おい、吉井と坂本。学園長がお呼びだ」

「鉄人!?!」

「西村先生と呼べ」

現れたのは2年F組の担任鉄人こと西村先生。あの学園長がまた呼び出したってことは……

「また何か厄介ごとを押し付ける気だな……」

同じことを思った悪友坂本雄二がけだるそうに立ち上がった

「明久、行くぞ」

「あ、うん」

今度は何があったんだろうか……

「で、今度は何なんですかババア長」

「次は何を回収するんです？」

「……アンタらは敬意というものを持つ気はないのかねえ……」

文月学園学園長の藤堂力ヲルは僕らの罵詈雑言に対してそうため息をついてから本題を切り出してきた。

「今度うちの学校で交流祭があるのを知ってるかい？」

「そんなのあったっけ雄二」

「いや知らん」

「……あんたは興味のないものにはとことん首を突っ込まないね……」

またもやため息をつく学園長。

「読んで字の如く他校との交流を目的としたものだよ。バカの吉井でもわかるだろう?」

心外だ。僕一人だけがバカ扱いされているとは

「で、交流の一環に召喚システムの体験があるんだけどそれをアンタらにやってもらいたい」

「なんで俺らが」

「学園探しても召喚獣に扱いなれてる生徒は数えるぐらいしかないからね。特にFクラスは試召戦争の経験が豊富なうえに一番扱いに慣れてる吉井までいるんだ。他校の生徒に教えるにはうってつけだ」

「でもこいつは筋金どころか超合金が入ってるバカですよ?　こんな奴にやらせたらバカが移ります」

「雄二にだけはいわれたくない!」

「ホントの事だろうがバカ!」

取っ組み合いをはじめた僕たちを三回目のため息とともに少し声を張り上げて学園長が僕たちに告げる

「とにかく、アンタらを中心に他校の生徒に教えたあと試合をする。これはもう決定事項だよ」

学園長は発注を終えたのであろうパンフレットを掲げてそういった。

「「試合?」」

「教えた後に対抗の召喚試合をするからね。優勝すれば何か賞品を考えておくさ」

「「ババアのプロマイドはお断りだ」」

「先に言わなくてもいいんじゃないのかい!」?」

「そのつもりだったのかよ!!」

「冗談だよ。あと人員は十人ほどいるからメンバーを集めておくよ
うにね。クラスは問わないよ」

「で、雄二どうする?」

「やるさ」

「へ? 何で?」

「バカだな明久。この日付平日だぞ? 準備片付けは学園がやってくれる上に堂々とサボれるチャンス逃すわけにはいかないだろう」

「そういえばそうだ。こんなチャンスはめったにない。」

「メンバーは誰にする?」

「ババアは十人って言ってたから……勝負事があるっていう点で
考えればAクラスから何人が引つ張ってくるのが妥当だろう」

「そういえば対決のルールについてはどうするんだろう?」

「前の日に教えてくれるってよ。ホームで無様な姿晒すわけにはい
かないだろう」

「というわけでこのメンバーとAクラスの何人かを加えてのチーム
で交流祭に臨むことにする」

雄二と僕がFクラスに戻った後いつもの仲間を集めてそう告げた。
メンバーはもちろん

吉井明久

坂本雄二

ムツツリー二（土屋康太）

木下秀吉

姫路瑞希

島田美波

「で、Aクラスの方は？」

「これから頼みに行く。翔子と他三人……たぶん協力してくれると思うけどな……」

「邪魔すつぞー」

「……雄二、結婚してくれるの？」

「いきなり何言いだしてんだ……。そんなわけねーだろ」

「……なんで……」

「今日は別の用事だからだ」

「……じゃあ私と入籍してくれるの？」

「それどっちも意味が同じじゃないか！」

「雄二。話が進まないよ……」

まったくこの2人はいつまでたつても……雄二も受け入れればいいのに。ただしその後には嫉妬に狂った連中の制裁が待っているだろうけど。

「吉井君、今日は何の用事だい？　まさかまた戦争を申し込んでくるのかな？」

雄二がいることからそう思ったのだらう。そう久保君が聞いてくる。

「そういうわけじゃないんだ。実は……」

（事情説明中）

「という事なんだけど」

「……雄二、私は出る」

「そうか、それは助かる」

霧島さんに関節技を食らっていて全然助かっていない雄二が平然とそう答える。

「そういう事なら僕も参加させてもらうよ」

「久保君も？」

「他校との交流は貴重だからね。ぜひ参加したい。（それに吉井君とも近づけるしね）」

最後の方がよく聞こえなかったが何か寒気がする。でも参加してくれるのは貴重だ。

「このメンバーだと……あとは工藤さんと木下さんでいいんじゃないかな？」

「私？」

「僕？」

「工藤さんもムツツリー二君と仲良くなる……」

「僕はムツツリー二君をそうは見えてないからね!？」

「……愛子、かわいい……」

「ちよつとー!」

「私は参加する」

木下さんの参加も決まった。その後霧島さんが頼んで工藤さんも参

加が決まった。

文月学園 参加メンバー

吉井明久

坂本雄二

ムツツリーニ（土屋康太）

木下秀吉

姫路瑞希

島田美波

霧島翔子

久保利光

工藤愛子

木下優子

第一問 交流祭（後書き）

不定期更新ですがよろしくお願いします。
要望等ありましたら反映したいです。

第二問 グループ分け（前書き）

テスト以外の事も考えないと……

第二問 グループ分け

バカテスト 現代国語

第二問 近くにあるものは意外とよく見えないものだという意味のことわざを答えなさい

【姫路瑞希の答え】

灯台下暗し

【教師のコメント】

正解です。探し物をしているとよく思う人も多いはずです。

【土屋康太の答え】

女子のスカートの中

【教師のコメント】

そこまで必死になる理由が先生にはわかりません

【坂本雄二の答え】

他の連中の明久への好意

【教師のコメント】

先生ですら気づくのになぜ吉井君は気づかないのでしょうか……

「えー、というわけで間もなく他の学校の連中が来るわけなんだが……」

「どうしたのさ雄二」

「相手は全5校50人だ。各学校には事前にある程度の説明がいつてはいるらしいが召喚獣の操作方法については詳しくはやってないそうだ」

まあそりやそうだよな。こんな設備めつたにないわけだし。

「そこでババアからの伝言なんだが……『2人ペアで1校ずつ受け持って教えるように』だそうだ。という訳で組み合わせ決めを行う」

「……雄二は私と組む」

「それでいいと思うよ。霧島さん」

「俺の人権を無視されているのは誰も突っ込まないのか!」

霧島さん以外と組もうものなら雄二は生きて帰れるか五分五分だろう。

「ボクはムツツリー二君と組もうかな」

「……………お前には負けない」

妙な火花が散っている工藤さんとムツツリー二。ここに割って入るのは野暮というものだろう。

「じゃあ私は秀吉と組むわ。それなら安心だし」
「姉上は何を心配しておるのじゃ……」

秀吉は姉妹で組むそうだ。絵になるしこれはこれでいいと思う。すでに一心不乱にカメラのシャッターを切っているムツツリがいるし、という事は残っているのは……

「残ったのは明久、久保、島田、姫路の4人か……。めんどくさいのが残ったな……」

どうめんどくさいのだろうか。久保君と組めば解決するよう気がするけど……

「明久君とは私が組みます！ せっかくのチャンスですから！」
「瑞希！ 抜け駆けはさせないわよ！ アキとはウチが！」
「ここは何としても僕が！ 吉井君の隣に！」

久保君のコメントだけ妙に寒気がする。

「物事は平等にするのがセオリーだからな……ここは揉めないで済むようにあみだくじで決めるか」

「……ゴクリ」

そこまで真剣になるものだろうか。

そうして雄二がどこからか紙を持ってきてそこに三本の線を書き、下に印をつけてアトラダムに横線を引いた。

「一発勝負、恨みつこなしだ。順番はじゃんけんで決めてくれ」

じゃんけんの結果

1 美波

2 久保君

3 姫路さん

「……じゃあ真ん中！」

「じゃあ次は久保だな」

「左で」

「という事は姫路が右か……。じゃあ始めるぞ」

雄二が一番左の久保君からあみだくじを始め……ようとしたその時

「まだこんなところにいたのかい」

「老婆 Lv78 が現れた！」

「あんたはろくな口のきき方ができないのかねえ……」

学園長だった。そして雄二を見つけるや否や

「何揉めてんだい。他の学校はもう体育館に到着しているんだから早くいつてもらわないと困るよ」

「あ、もう着いたのか。仕方ないな、試召大会との兼ね合いがあるから全員でやるってことで」

「「「……………」」」」

三人はひどく悲しそうだった。

第二問 グループ分け（後書き）

次回から他学校のキャラがだんだんと登場します

第三問 予選開始 文月学園VS桜才学園（前書き）

召喚獣対決開始です。最初は生徒会役員共の所属する桜才学園です。

第三問 予選開始 文月学園VS桜才学園

バカテスト 日本史

第三問 島原・天草一揆の指導者とされている人物の名前を答えなさい

【姫路瑞希の答え】

天草四郎

【教師のコメント】

正解です。この内乱は一般的には宗教戦争と言われていますが実際は様々な理由が絡まった百姓一揆というのが本当のところだそうです。なお、天草四郎の本名は益田四郎時貞と言います。

【吉井明久の答え】

島田美波

【教師のコメント】

頭文字が同じだからと言ってクラスメイトを反乱者にしてはいけません。

【土屋康太の答え】

桜才の生徒会長の先祖

【教師のコメント】

現実と仮想を混ぜないでください

学園長にせかされて体育館の舞台袖に着いた僕たちはそこから他校の生徒を観察していた。

「なんか女子が多いような……」

「だな。全体の八割ぐらいはいるな」

「……………！！（パシャパシャ！）」

隣では一心不乱にムツツリーニがシャッターを切っている。

「うう……なんかかわいい子たちが多いです……」

「プライドを打ち碎かれるわね……」

へこんでいるFクラス女子二名。

現在壇上では英語の遠藤先生が簡単な説明をしている。

『それではこれより予選を行います』

予選？　なんだろそれ？

「ああ、説明してなかったな。召喚獣に慣らす目的で他の五校と一

対一の総当たり戦があるんだ」

「勝つと何かあるのかの？」

「2位以内に入ると本戦でのシードがもらえる」

なるほど。勝ちにいく理由があるってことか。

「ただ本戦で勝つためにも相手のデータがほしい。できるだけデータを集めながらの戦いになるだろうな」

いよいよ予選が幕を開ける。

『予選第1試合、文月学園vs桜才学園の試合を行います』

「最初の相手は桜才か……」

「どんな高校なの雄二」

「男子が20数人、女子が500人強いハーレム校だ。進学校だから強いだろうな」

「……………その比率の方がすごい」

「同感だよ。ムツッリー二」

『それでは両チーム選手を選んでください』

ちなみに今回の試合では戦死してもテストを受ける必要はなく、自動的に元の点数に回復するようになってる。いちいち戦死するたびにやっていたら時間が足りないからだろう。

「誰が行く？」

「とりあえず様子を見てみるか。秀吉！　まずはお前から頼む！」

「了解じゃ。」

「最初だからな……全員が頭がいいとは思えんが、負けても構わない」

「やれるだけやってみるぞい」

向こうからは……なんか小さい人が出てきたけど……

「小学生？」

と思わずつぶやいた僕を見てこの小学生（仮）は……

「津田！　肩貸しなさい！」

後ろにいた桜才では数少ない男子生徒に肩車をしてこっちに近づいてくる。

「私は萩村スズ！　あんたと同じ１７歳！」

うそ！　「冗談でしょ！？」

「IQ180！　英語ペラペラ！　10桁の暗算は朝飯前！　どう！　これでも私を子ども扱いする！？」

「「へー。すごいねー」」

僕と雄二が見事にハモツた。

「もっと他の反応をしろー！ー！」

「ぐっ！　だったら実力でねじ伏せる！」

何かのリミッターが切れてしまったようだ。向こうでは必死で何人かがなだめてるなあ……。

「召喚を開始してください」

監督は我らが担任鉄人こと西村先生。全教科の監督ができるので呼ばれたようだ。勝利条件は先に6勝したら勝利となる。

「「試獣^{サモン}召喚！！」」

科目選択権は桜才学園。今回の科目は英語だ。英語ペラペラの実力を見せたいのだろう。

桜才学園　萩村スズ　　　　　文月学園　木下秀吉

英語　　　　　497点　　　　　VS　　　　　84点

「相当な差だな……翔子でも取れるかわからん点数だ……」
「あ、瞬殺された……」

圧倒的戦力差になすすべもなく秀吉は倒された。

「ま、でもおかげで要注意人物を把握できたからいいだろう。でき

る限り長引かせて全員のデータを集めておきたいが……勝ちも狙わないとな……」

負けず嫌いのこいつらしいな。

「続いて二人目の召喚を開始してください」

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

こちらからは久保君が出場。勝ちを取りにいったな雄二。

一方の相手は先ほど肩車を強制されていた男子生徒。津田君だったかな？

桜才学園 津田タカトシ 文月学園 久保利光

総合科目 1574点 VS 3967点

「この人はそこまででもないみたいだね」

「全員が全員翔子や姫路並みの点が取れるわけではないからな。点数でいえばDクラスの上の方かCクラスの下の方の点数だな」

特に番狂わせもなく久保君が勝利。これで1勝1敗だ。

「続いて3人目の選手は前へ」

「次はどうする雄二？」

「次に出てくるのは……あの三つ編みの女子か……結構強そうだな。」

「じゃあ姫路！ 頼むぞ！」

「は、はいっ！ 頑張ります！」

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

桜才学園 五十嵐力エデ 文月学園 姫路瑞希

数学 375点 VS 423点

やっぱり姫路さんすごいな……相手の女子も十分すごいんだけど。

姫路さんの召喚獣は相手を一閃して勝利した。

「勝ちました〜」

「じゃあこっからは負けに行く」

「え？」

「今は2勝1敗、あと4勝するには翔子、木下、工藤、あと俺がいれば相手にもよるが十分勝てるだろう」

「じゃあなんで負けに行くのさ」

「最初に言っただろう。データの収集のためだ。という訳で明久、ムッツリーニ、島田に特攻を命じる」

「なんで僕たちが戦死要員なのさ！」

「そうよ！ ウチも数学なら戦力になる！」

「……………保健体育なら負けない」

「あのな……お前ら3人はある意味切り札だ。一点突破型の利点はよく知ってるだろう？」

う……………確かに……………

「伏兵にするには点数を明かしたらずいだろう。決勝で十分使わせてもらうから我慢しろ」
「なら仕方ないわね……」
「……………協力する」
「で、どうしたらいいのさ」
「強そうなやつに特攻する。それだけだ」
その結果……

桜才学園	七条アリア	文月学園	吉井明久
現代国語	419点	VS	74点

桜才学園	畑ランコ	文月学園	島田美波
保健体育	443点	VS	24点

桜才学園	轟ネネ	文月学園	土屋康太
総合科目	1463点	VS	856点

ま、こうなるよね……

第三問 予選開始 文月学園VS桜才学園（後書き）

次回はVS桜才戦終了です

第四問 文月学園VS桜才学園 生徒会長の實力（前書き）

時さんの名前ってなんだろう……

第四問 文月学園VS桜才学園 生徒会長の實力

交流祭アンケート 文月学園編

第四問 桜才学園に対する印象を書いてください

【姫路瑞希の答え】

落ち着いた感じのとても良い学校だと思いました。

【教師のコメント】

そうですね。九割以上が女子なので落ち着いている印象が強いですね。

【工藤愛子の答え】

生徒会の人と話したら話が盛り上がった。

【教師のコメント】

その話が危険なおいのしないことを祈ります。

【土屋康太の答え】

撮りがいがある学校だと思った。

【教師のコメント】

あとで西村先生から話があるそうです。

現在の勝敗は2勝4敗。僕たちはかなり追い込まれているが……

「よし！ あと4つ行ける！」

こちらには精鋭がまだ残っている。もう負けはない！

「待て明久。早まるな」

「へ？」

と思ったら雄二が僕を制止してきた。

「なんでさ雄二。見た感じもう向こうにはそんな戦力は……」

「5勝5敗になったらどうなるか知っているか？」

「知らないけど」

「アホ。そのまま引き分けになるんだよ。普通に考えればわかるだろ」

アホは雄二もだろうが

「引き分けになれば勝利数が減る。そしてもしも勝利数が並んでしまったら……」

「どうなるの？」

「こなしした試合が少ないチームがシードをとれる」

「つまり……？」

「無駄な策を使う必要が出てくる。こっちの今の作戦は情報収集だ。試合数は当然多くなる。あと生徒会がまだ一人出てきていないのも気になる」

「生徒会の人？」

「一番手で出てきたのは会計、2戦目で出てきたのは副会長、4番手で出てきたのは書記だ。会長がまだ出てない」

「それがどうかした？」

「ったく……これだから明久は……。いいか、あの副会長はいざ知らず書記と会計の点数が異様に高いことから考えればわかるだろう」

「……当然会長も点数は高い」

「その通りだムツツリー」

「……明久の頭の回転は異常」

「壊れてるってこと！？ そんなわけないじゃないか！」

「……でも事実」

「くっ！……」

ちよっとうまく考えられないだけなのに……何だろうこの言われよう……

「次は7戦目だな。先手は桜才だから大丈夫だろう」

「会長、そろそろ出ないと終わっちゃいますよ？」

「萩村、大将というのは最後に出るものだとよくいうが？」

「シノちゃん、学校代表で来てるんだから」

「学校代表できてるだー！」

「いつもの会長だなー」

「……」

「……」

「……雄二」

「……なんだ明久」

「……あの人達特に作戦があるわけじゃないみたいだね……」

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

そうこう言っているうちに7戦目〜9戦目が始まった。

桜才学園 津田コトミ 文月学園 木下優子

英語 62点 VS 349点

桜才学園 トッキー 文月学園 坂本雄二

世界史 59点 VS 264点

桜才学園 三葉ムツミ 文月学園 工藤愛子

古典 107点 VS 370点

どうやら注意すべきなのは小さい人（萩村）と色気がある茶髪の人（七条）と三つ編みの女子（五十嵐）、それとまだ出ていない腕組みをしている生徒会の腕章をつけている人（天草）という事になる。

他の人は一部突出した科目を持っている人がいたがそれを回避すれば大丈夫そうだ。

「明久、翔子とあの会長が戦うぞ」

「え？」

見ると霧島さんがあの会長ともう向き合っていた。

「「試^{サモン}獣召喚！！」」

桜才学園 天草シノ 文月学園 霧島翔子

数学 469点 VS 472点

「これはかなりすごいね……」

「確かに……想像以上だな……」

450点ぐらいだと高をくくっていた僕らにとってはなかなか衝撃的なものだった

「まあでも大丈夫だろう。今は」

「そうだね。だって……」

桜才学園 天草シノ 文月学園 霧島翔子

数学 0点 VS 231点

「経験があるからね」

「しかしあの翔子がここまで削られるとはな」

「後半の辺りはなれだしていたからね」

途中からこの会長召喚獣の操作に少し慣れだしてきたような感じがした。

「これはなかなか厳しいかもな……」

第四問 文月学園VS桜才学園 生徒会長の實力（後書き）

わからないのであだ名になりました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5263z/>

バカとテストと召喚中！

2011年12月27日20時46分発行